旅人還る

理学部４回生　勢原拓海

最後に残った人類未踏の地、宇宙。ウラシマ効果とコールドスリープの技術を用いてその宇宙の果てへ人を送り込むという、人類という種にとっての一大事業、フダラク計画が断行された。井の中から大海へ飛び出したい、と恋人に別れを告げて宇宙へ旅立った主人公（以下、旅人と表記）であったが、変わらない宇宙の景色や孤独な旅のために次第に感情がうすれていく。そして永い旅の途中、突如として宇宙が収縮を始める。その宇宙と共に無に帰ろうと、最期のコールドスリープについた旅人であったが…。

はじめに断っておくと、この作品はギャグ漫画ではない。また、長い宇宙での旅に置ける心境の変わり様を描いた作品なので、根本のテーマには目新しさが無い。しかし、私が初めてこの作品を読んだときに受けた衝撃はすさまじかった。

まずはフダラク計画の立案者による、狂気じみた演説。常軌を逸した考えなのに、どこか納得させられる迫真さがある。宇宙の果てを見た感動を地球の人々に還元する必要はない、という考えが、まさしく異常と真理とを兼ね備えているように思えた。

また、宇宙を進むにつれて興奮の増していく読者、終始同じ調子である宇宙船メインコンピュータのチクバ、そして感動をおぼえなくなっていく旅人と、三者三様の感情の変化が面白い。作中では、電波の応答時間、宇宙船の速度、新たな銀河への到達と、地球からの距離を様々に表現している。旅人と時間を共有していない読者は、これらの描写によってまだ見ぬ宇宙への憧れが増すのだが、永く宇宙船で過ごした旅人の反応はどんどんと冷めていく。スターボウを観測したり銀河系を抜けたりした際の読者の興奮と旅人の応答との差からは、起伏の無くなった旅人の情緒が見て取れるだけでなく、後に分かる地球への郷愁の思いをより一層強めている。

そしてこの作品を勧めたい一番の理由であるが、それは漫画だからこその表現法が劇的だからだ。これこそ読んで味わってもらいたいので深く述べはしないが、宇宙に関心を示さなくなっても地球の情報にだけは心を動かされる旅人の心情、無となった宇宙の景色、静止画だからこそ可能なこれらの描写は一度読めば忘れられないと思う。

と、ここまで極力核心には触れないように紹介したので、あえて避けた部分もある。ぜひとも読んでもらいたい。するとこれは何だ!!と感じてもらえるだろうし、「帰る」でなく「還る」という言葉選びの秀逸さも分かってもらえるだろう。ブラックではないＦ先生のＳＦ短編への足掛かりとしても、おすすめの作品だ。